

〔公募論文〕

自己知覚と環境知覚の相補性

——ギブソンとフツサル——

元明 淳

序

本稿では、これまで現象学的思惟との親近性が折にふれ語られてきたJ・ギブソンの生態学的心理学〔1〕の基本的な発想を、現象学の創始者フツサールの思想と比較・検討することによって、両者の観点の著しい親近性と、哲学的な認識論のさらなる発展的方向性を提示することを目的とする。もともと両者の間には周知のように、前者の「反表象主義」と後者の「表象主義」、さらには方法論上、前者が基本的には物理学的な実在を限定つきで認めていること、後者が自然的態度においては実在との直接的接触を言いながら、態度の転換によって実在の、還元（エポケー）による超越論的観念論の立場をとるという点で大きな違いが存する〔2〕。しかしここでは、そうした相違点ではなく両者ともに知覚作用を身体による能動的な行為性として捉えようとしたこと、さらには生態学的心理学と現象学が具体的

な事象分析において、実りある相互対話の可能性を開くことに着目するものである。その意味で既に日本でも、河野哲也などがギブソンの根本発想を摂取して新たな「生態学的哲学」の構想を理論化していることは注目に値する<sup>3)</sup>。しかしながら本稿では、フッサール解釈においてまだ十分に省みられていない思惟の動機、つまり経験の「他性」の側面に注目することで、彼の現象学的な洞察が今なお、経験科学の成果とその理論に十分、堪えられるものであることを示したい。

ところでギブソン心理学の基本的な理論の一つに、従来の伝統的な哲学、心理学、ひいては認知科学における表象主義とは一線を画し、環境世界は私の中の表象、心や脳の中で間接的に推論されたり、情報処理されたりするものなどではなく、人間や動物にとって客観的に実在する有意義な情報や価値、いわゆるアフォーダンスとして直に掴まれているとする「直接知覚説」がある。このいわば反表象主義の立場は先述したように、全く同じとは言えないまでもフッサールにとっては、前・中期以降の身体論、特に「キネステーズ」的意識の概念を通して、従来の表象的意識の欠陥を乗り越える仕方として含蓄的、示唆的に既に語られていた。厳密に言うとその超越論的な觀念論の枠組みにおいて、現象性としての身体的意識の側面に着目した現象学的身体論の萌芽形態と言うべきかもしれない。すなわちそれは、意識あるいは心を身体や環境から切り離された抽象的で宙に浮いた主観としてではなく、あくまで身体化され(embodied)、同時に環境世界の何らかの文脈に状況づけられた(situated) 具体的な主観として捉え直すという試みである。その際、(1) 生態学的立場を代表するギブソン心理学において、環境中の客観的な意味や価値としてのアフォーダンスが、身体の能動的な探索活動によって知覚の巻き添えにして初めて顕在化されるプロセスと、フッサールにおけるキネステーズ的意識、いわゆる「運動する感覚」が世界の側の感性的なヒューレ的触発を可能にする必要、条件であるとする立場とは極めて著しい親近性をもっている。こうした知覚のエナクティブ(enactive)な行為性は、

神経現象学者のヴァレラやトンソンなど今まで数多の論者によっても指摘されている<sup>(4)</sup>。また(1)に関連している<sup>(5)</sup>と、(2)ギブソンが知覚を局在化された個々の感覚器官の単なる集合としてではなく、システム、体系の全体として把握しようとした試みも、フッサールが前期の『事物と空間』講義(一九〇七年)以来、指摘し続けていた「キネステーゼ的システム」の概念、さらには後期に明示的に語られる身体の全体性における個々の身体機能の相互的結合の観点と少なからず重なりあう。

そこで本稿では、以上の(1)と(2)の観点をまずは議論の前提に据え、さらにギブソン心理学の要諦とされる「環境知覚とは自己知覚である」(環境の知覚は同時に自己身体の知覚情報を含む)とする理論と、フッサールの身体論の帰結とされる「自己触発と異他触発の相互依存」の主張とを折りあわせ、比較・検討することで、後者の現象学的洞察が前者の認知科学的知見によつて具体的に補われ、豊かにされるということ、およびそのことによつて一般にフッサールが等閑視してきたと見なされている「他性」の、彼自身による擁護に裏づけを与えることができることを示したい。というのも、これは一部の論者達が「キネステーゼ的な」内面性、その運動志向性を、世界の側からのヒューレ的触発を可能にする身体性の枢要な側面として評価しながらも、フッサールは環境中の客観的なアフオーダ、ンスの側面を考慮していないとする浅薄な批判への再批判にもなるからである<sup>(5)</sup>。なるほどこうした批判はことフッサール解釈に関して、例えばキネステーゼ的意識が主観性の内面性において自己充足している「純粹自己触発」に生きているとするアンリ的な内在の哲学には当てはまるとは言えても<sup>(6)</sup>、フッサール身体論の豊かな含蓄を捉えそこなつていると思われる。なぜならフッサールは自己意識、その自己触発の純粹な内在性のみを強調していたわけではなく、それを同時に可能にする外部性、異他性の次元をも視野に収めていたということ、端的に「キネステーゼはその外部をもつ」と述べていたからである。もつともこの意味での異他性をギブソンのアフオーダダンスの位相と短絡的

に同一視することはできないが、少なくとも環境の客観的側面としての価値や意味の次元（アフォードダンス）と異他的なヒュレー的触発の次元、現象学の最終的な術語では「原ヒュレー（Urhyle）」の次元とが様相的には少なからぬ類似性を示しているということは注意されてよい。本稿の試みは、以上の両者によるアブローチの親近性を露呈することによつて、一方で立ち現れの直観的な記述を旨とする現象学の方法が今なお、その有効性を保持しており、その意義はいささかも減ぜられることはないということ、他方で同時にそうして得られた現象学的成果は経験科学の知見、データによつて検証され、根拠づけられる必要があるということが示され、こうして両者の対話の豊かな可能性を開くことに寄与することになるだろう。

## 一 知覚のエナクティブな行為性格

既に序で示唆したように、われわれの知覚をありのままに記述すれば、それは外界からの感覚刺激の単なる受動的な受容 (acceptance) ではなく、知覚主体の能動的行為 (action)、つまり主体自らが環境へと積極的に働きかけて初めて刺激をそれとして有意味なものたらしめるといふ能動的な身体的行為、いわゆる「エナクション (enaction)」と呼ばれるべきものである。このことはギブソンとフッサールに共有される根本的な観点であると言える。まずギブソンの基本的な考え方から見よう。

彼によれば、環境の与える情報は何も物理刺激として脳の中枢部で間接的に処理・操作される必要はなく、最初から環境の側にある客観的な意味や価値として実在しており、われわれは直接、それらを知覚しているという。それゆ

え意味や価値が心の中に存する、ないし構成されるところの主観的なものだとする立場とは対極をなす。例えば電車の空席や地面は、知覚する主体に対してそれぞれ座る・立つ・歩くといった行為を促してくる。またこれら人工物以外にも、ある物体が膝ぐらいの位置にあり平面で適度な広さと硬さをもつて知覚されるような自然物ならば、それもまた知覚者には「座席」として捉えられるにちがいない。彼はこうした環境の側が人間や動物に提供してくれる(offer, afford)意味や価値の次元を彼特有の造語で、アフォーダンス(affordance)と呼んだ<sup>7)</sup>。この基本発想は、世界が心や脳の中の表象として形成されるとする従来の哲学や認知科学の立場と袂を分かち、環境そのもののもつ意味や価値の実在性を強調しようとした点において、極めて革命的な出来事だったのである。ただしここで注意せねばならないが、アフォーダンスとしての意味や価値が人間と環境との交渉を離れて、それ自体として存在しているとする「客観的实在論」ではなく、われわれ知覚者がそれらを身体行為や運動の巻き添えにすることによって、むしろ能動的に探索し、ピックアップするような環境が問題となっていることである。ギブソンはこの微妙な位相に存するアフォーダンスを動物と環境の両者に関連するもの、ないし両者の「相補性」と表現している。動物は自らの身体に固有な棲息環境、いわゆる生態学的なニッチ(niche)を形成するのであり、例えば水平・平面・広がり・硬さといった一見すると物理的特性と思われるアフォーダンスでも、これらの特性はそれぞれの動物に固有であり、決して単なる抽象的な物理的特性などではなく、当該動物の姿勢や行動と関連した統一性をもっている(例えば、サバンの草地が人間とチーターの走行にとつてもつ意味は全く異なるだろう)。逆に言えば、環境との関係性は動物のもつ器官の形態そのもののうちに書きこまれているのであり、それゆえギブソンは、アフォーダンスを、従来の主観的―客観的、心理的―物理的の二分法を超える概念と見なし、それは環境の事実であると同時に、行動の事実でもある、と言う(『生態』一三七頁以下)。こうして知覚主体と環境とは循環的に相互作用しており、アフォーダンスが両者の

いわば中間に存しているがゆえに、彼の言う環境の实在性を強調する立場を「生態学的实在論 (ecological realism)」と呼ぶ。このように知覚主体は特定の環境に位置づけられ、そして自ら運動、行為することによって環境の情報を自らに供与しているというわけである。簡約すると、ここで問題となる環境の供与する情報とは能動的で「探索的な情報抽出」の意味での情報に他ならない。ゆえにギブソンは、感覚を知識の唯一の源だとしたロック以来の経験論的な感覚説や、ヨハネス・ミュラーの「特殊神経エネルギー」説、すなわち感覚は経験の特殊な質の経路であつて、それは外界の物理刺激をそのまま反映しているのではなく、神経において惹き起こされた感覚の個別的な状態にすぎないとする「感覚内容の所有」説を手厳しく批判する(『知覚システム』五五〇五七七頁)。

さて同様に、フッサールにおいても現象学的な立ち現れの分析を通して、知覚対象の構成に諸感覚の担い手である身体の機能が関与していることは早くから見えてとられていた。対象はいつも私の身体を方向づけの中心、零点として、私の右側に、前方に……等々といった具合にパースペクティブ(遠近法)的に与えられる。認知主体はその際、単なる抽象的な意識作用としての宙に浮いた主観ではもはやありえず、自らが諸々の感覚の担い手として身体化されることによつてのみ、対象を知覚することができる。この意味での身体化された感覚の位相が前期の『事物と空間』講義以来、運動感覚、いわゆる「キネステーズ」の名で呼ばれてきた身体意識の位相に他ならない。ただしこの意味での運動感覚は、それまで心理学や生理学で用いられていた實在的な運動についての感覚ではなく、あくまで現象学的還元を施されたあとの純粹現象としての運動する感覚を意味し、フッサールはこうした誤解を避けるため「キネステーズ的感覚 (kinästhetische Empfindung)」(XVI, 161)<sup>(9)</sup>というある種、同語反復的な表現を用いる。諸感覚は決して静止的・受容的ではなく、対象の諸性質を調達するために自らのうちに運動を孕みながら能動的に世界へと関わっている「世界―内―存在」の運動なのである。例えば視覚なら両眼の調節作用によつて、聴覚なら音源へと耳をそば

だてることによつて、触覚なら手指の平滑筋を滑らすことによつて、各々に対応する対象の諸性質が知覚される。しかも運動感覚とそれに対応する対象面の呈示、具体的にはその「像」との間には、私がかくかくに身体の運動感覚を働かせば、その結果として対象の像がしかじかに変化するという相関関係が見出される。こうした「もし…なら、…である (wenn…so…)」という動機づけ連関は、一種の空間的な「地平」の意識として引き続き対象面の像の呈示を先行的に枠取りしており (vorgezeichnet)、まさにこの連続的なキネステーズ的意識が対象の様ざまな立ち現れを横断して、その同一性の意識を保証しているというわけである (vgl. VI.164)。その際肝要なのは、キネステーズは「自らを呈示することなく、対象の呈示を可能にする」(XVI.161)と言われるように、キネステーズが自らは背景的な自己意識となつて退くことで知覚対象を顕現させているということである。私が何らかの対象、例えば食事をしようと思つてフォークを握むためには、私(Ⅱ方向づけの零点としての身体)との関係においてフォークの位置を知る必要がある、これは対象についての知覚は、私自身の身体についての何らかの情報、明示的に気づかれてはいないが、いわば先づ反省的な自己覚知を含んでいなければならないことを意味する。「身体化された主観」という意味には、知覚の行為性のみならず、対象が与えられるための自己身体の所与、すなわち一種の身体的な自己覚知が含まれているのであり、ザハアヴィの言葉を借りれば、私(Ⅱここ)とはまさに知覚対象(Ⅱそこ)の所与が独特の仕方に関係づけられるような参照点 (the point of reference) に他ならない<sup>(9)</sup>。またこの事態を知覚主体と対象(世界)との相互参照と呼ぶこともできる。こうして、身体的自己覚知は、空間対象の構成のための可能性の一条件となるのである、それゆえ知覚は、運動する身体の自己感覚作用ないし自己触発と相関し、それに伴われることによつて初めて可能になつていたのである。

このようにギブソンとフッサールの間には、意識ないし心は世界をいわば受像機のように映像として写している対

応説、さらには構成しているといった表象主義ではなく、知覚における身体的行為への着目、すなわち環境世界への能動的、探索的な「介入」によって客観的な實在、ただしギブソン的には生態学的な實在に到達しようとした反表象主義という点で、顕著な親近性が見出される<sup>(1)</sup>。ただしフッサールの場合、先述したように基本的にその中期までの立場はあくまで超越論的観念論、すなわち意識内在の領域において世界を構成するという表象主義の立場が保持されており、それゆえ積極的に反表象主義が唱えられたわけではないので、非表象主義の萌芽形態と言った方が適切かもしれない。もつとも彼において、表象主義や超越論的な基礎づけ主義の理想を最終的には放棄しなかったのだという一般的な理解が今なお幅を効かせているのが確かだとしても、少なくとも超越論的主観性の具体的な内容を身体運動のキネステーズ的意識に求めた彼の身体論、特にその身体的な自己覚知の理論には、ギブソンの反表象主義と比肩させられるべき鋭い洞察が含まれているように思われる。

## 二 知覚システムとしての諸感覚

両者にとって第二の共通点は、一般に知覚の各機能が従来、それらに対応する個々の局在化された感覚器官に求められ、ひいては知覚をそれら器官の集合体として捉えていたのに対し、知覚とは予めその全体性へと関係づけられた一種のシステムとして考えられているということである。たとえば眼は視覚の単なる器官などではなく、視覚と他の身体分肢とは相互補完の関係にあつて、われわれは単に眼だけで物を見てのではなく、身体全体を使つて見ていることに異論はあるまい。私が静止状態ではんの少しでも、机の右側にある時計へと目をやる時でさえ、頭の向け替

えや軀幹の立て直しと連動する仕方で視覚は営まれている。ギブソンはこれを、じつと眺めること、つまり見つめることと見回すこととの区別として注意を促し、「視覚は全知覚系であつて、感覚の一経路ではない。われわれは眼で環境を見るのではなく、『地面に位置する身体上の頭部にある眼』で見ているのである。心の座が脳にあると考えられるような仕方では、視覚は身体に座を有していない。生体の知覚能力は、個々に分かれた身体の解剖学的部分にあるのではなく、組み合わさつた諸機能をもつ系 (System) にある」(『生態』二二〇頁)と述べる。すなわち、眼は頭部の眼窩の中に、頭部は胴体の、胴体は脚の上に位置して、これらがいわば有機的に支えあつて初めて視覚機能を可能にしているというのである。

フッサールもまた同じ事態を『事物と空間』で、キネステーズ的感觉による視空間の構成における眼球運動、および単眼の段階から両眼の段階への視野の変容過程(＝奥行視)、さらに頭や上半身の運動、ひいては歩行運動による自由な方向づけの空間の呈示について詳しく分析していた(Vgl. XVI, 164-255)。しかし、この位相では身体の全体性が考慮に入れられているとしても、諸々のキネステーズが静態的な観点において並列的な連結とみなされ、身体的総合における部分機能の全体機能への包括的連関は顧慮されないままに留まり、メルロ＝ポンティやシュトラウスが説くように、同一の感覚(官)内部でさえ、例えば両眼視が輻輳角によつて同一の視覚像を結ぶのと類比的に、「諸感覚(官)は、物の構造に自らを開くことによつて互いに交流しあう」とした感覚同士の協応(働)の視点がまだ欠けている。しかし、フッサールは後期以降の身体論で表明的に、「視覚的に進行していく外的知覚において、事物は単に視覚的なものとして思念されているだけではない。連続的に他の感覚領域の諸志向もともに目覚めさせられ(mitgeweckt)、視覚領域の本来的・印象的な志向と、何らかの総合の統一において同調させられるのでなければならぬ。なぜなら、諸々の志向は対象的意味をもとに構成している(mitkonstituierend)のであるから」(XI, 100)と

か、これら諸感覚を担う身体分肢の相互的結合、しかもそれらが一つの全体機能に奉仕する事態にも着目し、「各々のキネステーズは、他のキネステーズと静止や自己運動において能力的に結合されうる——(身体の)機能分肢を一つの機能の全体に、組織化された諸機能の統一に結びつけるような——(そうした)意味を既に受け取っている」(XV, 264, 括弧内筆者挿入)とも述べていた(Vgl. XV, 292, 294)。ここにはギブソンと同様に、全体的身体性においても機能する (mitfungieren) 諸キネステーズ同士の目的論的な知覚秩序の体系、ないし全体機能における部分機能のいわば「志向的相互嵌入 (Ineinander)」の現象が示唆されている。それゆえこの観点から先の視空間の構成分析を捉え直すならば、見るという視覚器官 (眼) の単なる一機能でさえ、頭や胴体、脚などの躯幹との連動、その知覚体系の中で初めて意味をもつのだということが知られる<sup>12)</sup>。いやそもそも「運動する感覚」としてのキネステーズそれ自体が、単に心理学ないし生理学で語られてきた専ら筋肉感覚からもたらされる運動感覚のことではなく、あらゆる感覚 (官) に共通する最も基底的な感覚であるとされたことから、個々のキネステーズ的感覚をそれだけ抽象して取り出すことは事象にそぐわないのではあるまいか。それゆえ以上の洞察こそがもう一度、心理学によつて取りあげ直される意義は大きいと思われる。ではいったい、フッサールの説いたこのキネステーズの位相に相当する概念は、ギブソン心理学においては何なのか。

それは、自分が自分であるという感覚、いわゆる自己のアイデンティティをもたらずとされる「自己受容感覚 (proprioception)」である。従来、諸感覚に関する伝統的区別では、まず①眼や耳、肌などの外受容器から入ってくる外受容感覚 (exteroception)<sup>13)</sup>、ついで②筋肉・関節・腱などの自己受容器から刺激を受け取る自己受容感覚、さらに③内臓器官の感覚を提供する内受容感覚というふうに分類されてきた (シェリントン一九〇六年)。自己受容感覚は①の五感 (官) に対して、いわば六番目の感覚とも呼ばれうるものであり、自己身体の位置・緊張・動きを感

知したり、修正したりするものだが、いつもは無意識的、自動的で気づかれていないものとされる。そしてここで肝要なのは、心理学や生理学で語られる運動感覚（キネステーズ）は従来、この意味での自己受容感覚と見なされてきたということである。しかしギブソンは自己身体の情報をフィードバック（再入力）するこの自己受容感覚を上述の筋・関節などの身体の可動部のみに限定せずに、前庭系（≡平衡感覚）・皮膚感覚・聴覚・視覚にまで拡大して（全部で六個）、これらは各々が異なる解剖学的構造とそれに対応する刺激作用の形態化に関わりながらも、自分自身についての同一の情報を提供していると主張する（『知覚システム』三九〇―四一頁）。すなわち、自己受容感覚はあらゆる諸感覚の根底にあつて、それらが協働して自己意識の成立に寄与する。「身体全体の知覚系を用いた総合的な機能」に他ならない。とりわけギブソンは視覚的な自己受容感覚に着目し、視覚は単に環境の情報を調達する役割だけでなく、われわれ自身の身体位置と運動に関する視覚的情報をも供与するものとして重視する。例えば、われわれは外界のある対象を見ている時にも、同時に私の視野内には自分自身の鼻や私の身体の付属対象である手や足が同時に見えている（E・マツハの有名なあの視覚野の自己像を想起されたい）。それによつてわれわれは自分の身体がどこにどうあるか、どのように動いているかといった位置や姿勢、身構えなどの情報や、対象が私の身体とどのような位置関係にあるのかといった情報を手に入れることができる。河野も指摘しているように、従来の「自己意識」の概念は放棄されねばならず、自己の状態を告知するものとしては、視覚的な自己受容感覚に代表されるこうした知覚を「自己知覚」と表現するのが相応しいであろう<sup>13)</sup>。（以下では、自己を身体的に内的に感じていた従来の意味での自己意識を自己知覚、一方ギブソンの挙示する新たな視覚的な自己受容感覚のことを自己知覚として明示的に区別することにする）。したがつて、ギブソンはこうした環境知覚と自己知覚との関係性を次のように結論づける。「自己についての情報は環境についての情報に伴い、両者は分かちがたい。コインの両面のように、自己の知覚と外界についての知覚

は分かちがたい。知覚は二つの極、主体的なものと客体的なるものをもち、情報はその両者のいずれをも特定するの  
に有効である。人は環境を知覚し、同時に、自分自身を知覚する」(『生態』一三六頁)と。これが、彼が「自己知覚  
は同時に環境知覚に他ならない」とする理論の骨子であり、通常なされる認知主体と客体(環境)との区分は実は抽  
象化された注意の分極化にすぎないとして棄却されるのである。

このように従来、筋感覚などの運動感覚に限定されていた自己受容感覚を、外受容系の感覚、すなわち視覚・聴  
覚・触覚なども含めた全身的な知覚システムとして捉えようとするギブソンの根本発想は、フッサールにおいて示唆  
されていた全体的身体性における諸キネステーズの有機的な結合、志向的な相互嵌入の具体化として特筆に値する。  
では、フッサールのキネステーズ論には、こうした自己知覚と環境知覚との相補性を説いた観点は含まれていないの  
だろうか。通常の理解では、キネステーズは自己身体についての「内的な」態度を通して得られた、内側から感じら  
れている生きられた身体運動であつて、この意味でのキネステーズは一見するとギブソンによつて新たに提示された  
自己知覚としての自己受容感覚、つまり視覚的な自己認知という側面とは相容れないように思われる。しかしこうし  
た理解は序でも触れたように、世界の側からの感性的触発、つまりヒュレー的触発を可能にするキネステーズ的な  
「運動志向性」の主観的、な側面のみに着目した、おぎなりの浅薄な解釈に留まつている。というのも、フッサールは  
キネステーズを決して内的な身体性の側面のみ限定しておらず、それは外的身体性との境界面、接合面において初  
めて意味をもつことを強調していたからである。このことは彼が、自分が自分であるという自己性の根拠を、超越論  
的な内在領域の自己充足した現象学的な「生」(例えばアンリの主張する内在における自己触発)にのみ求めていた  
のではなく、あくまで外部としての異他性の領域、ここでは世界(環境)やわれわれの外部身体との交錯のうちにも  
見てとつていたことを意味する。以下では、フッサールのキネステーズ論における「他性」の擁護という側面を論

じ、引き続き節でそれを裏づける神経科学の成果を提示して、それをギブソンの自己受容感覚の帰結と照合・総括することにより、現象学的分析の妥当性を示すことにしたい。

### 三 身体の自己触発と異他触発<sup>(14)</sup>

既に(一)でも簡単に示唆しておいたが、あらゆる知覚作用のうちには自分が自分の作用を意識しているという自己意識の働きが含まれている。それゆえ対象についての意識は同時に自己についての意識を含んでいる、つまり志向性はそれ自らが何らかの仕方では意識されているということとはフッサール読解にとって周知の事実となっている。ただしこの意味での自己意識は、自分が己の意識作用を能動的・反省的に対象化している、自覚的に意識しているという客観的な覚知ではなく、いわば含蓄的・非客観的で受動的な自己自身との先行的な覚知を言い表している。前者の反省的な自己覚知に先立って、なおかつそれを可能にしている後者の先「反省的な自己覚知の位相の重要性をフッサールは折につけ、繰り返し指摘している。そこで本稿では専らわれわれが世界を知覚している時、同時に自己自身をも反省に先立って身体的に覚知しているという身体的自己覚知の意味で取りあげる。それゆえラントグレーベが、キネステーズの先「反省的な性格という脈絡で述べていた以下の文言は今なお正鵠を射ている。「自ら動くことは自己自身との関係であり、自ら動くものは己の運動を自分のものとして〈知って〉いる。しかしそれは、反省におけるような仕方では知っているのではない。それはむしろ遂行の只中における遂行の直接的な確信であり、それゆえフッサールが〈後からの覚認〉と定義する反省のようなものではない」<sup>(15)</sup>。しかしこの指摘だけでは、キネステーズ的意識は

対象の諸性質、そのヒュレー的触発を可能にするための内在的な自己知覚のみで成立する、言い換えると知覚は身体的自己知覚、すなわち運動する身体の自己感覚作用ないし自己触発に伴われることによつてのみ成立するという主観的な側面のみを強調することにならないか。もしそうなら、環境の側の客観的な諸性質、ギブソンの用語でのアフォーダンスは一方的に身体知覚の能動的な探索活動によつてのみもたらされ、認識される二次的な存在に貶められてしまうであろう<sup>(16)</sup>。

しかしながら一方でフッサールは、キネステーズの内面性とそれに対する他なるもの、外的なものとの不可分性、相関性についても度々注意を促し、身体的自己知覚と对象的知覚との等根源性ないし同時的な生起を強調している。「(生じられた)身体が知覚されるのは、それを『媒介にして (mittels)』その都度の現出様式において知覚されている事物と一緒になつてのことである」(VI10)。あるいは「キネステーズの体系は予め構成されているのではなく、むしろそれはその体系がその都度、超え出ようとする (hinauswollen) とつろのヒュレーの対象の構成と一つになつて生じる」<sup>(17)</sup>。これは私が対象、ないし自己の身体を触れる時に、対象面の感覚(呈示与件)と自己感覚(位置与件)とが同一の場の共属性において互いに重なり合う、いわゆる「二重感覚」の現象において顕著に見てとられる。なるほど、後者の自己感覚を表す一種の体感、いわゆる「感覚態 (Empfindnisse)」は、「自己感覚作用の原基的場としてヒュレーとキネステーズとを統合する事実を呈示している」「身体的な出来事 (Leibesvorkommnisse)」(IV.145f)と見なされた。ここにも感性的触発としてのヒュレーと、それを調達する自己運動としての内的キネステーズとの不可分性、すなわち異他触発と自己触発との相互依存が見てとられうる。しかしフッサールはさらにキネステーズに関して、われわれが往々にして誤解を招きやすい観点を予防するかのよう<sup>(18)</sup>に、以下の注目すべき発言を残している。「キネステーズは、物的的に自己を呈示する身体運動 (die sich körperlich darstellende Leibesbewegungen) からは区別

されるが、しかしそれは独特の仕方です。これらの身体運動と一つになっている。つまり、キネステーズは、(内的キネステーズと物的に実在する外的運動) (innere Kinästhesen — äußere Körperlich-realen Bewegungen) という二重の側面において自己固有の身体に属しているのである」(VI,164)。換言すると、自己運動としてのキネステーズが本来に機能するためには、前者の「内的身体性」のみならず後者の「外的身体性」をも必要とするのである。この点に関して水野和久は、アングリの「生の自己触発」、つまりいかなる外部身体をも必要としない「純粹身体性」の強調に抗して同趣旨の主張を展開しているし、同じくヴァルデンフェルスも身体の自己触発作用だけでは、いかにして主観性が身体的な外部性を所有するようになるのかという問いは永遠の謎に留まるという<sup>(18)</sup>。運動は絶えず、『心理・物理的な仕方』で『二面的に経験される (XV,279, Vgl. XV,323)』と言われていたことから、如何なる外部の空間性からも解放された身体性、ないし身体的自己覚知というものは考えられない。ゆえに身体の自己触発が成立するには少なくともキネステーズが演じられる空間的局所化が必要なのではないか。水野も言うように、「空間性をもたない運動性とは明らかに自己矛盾だからである」<sup>(19)</sup>。なるほど、内的身体性を強調する立場から見れば、例えば左手がフォークを握む時、私は一々左手の空間的な位置やその内部感覚を取り立てて意識することはしない。その際、私の左手はまさに生きられており、その運動は先づ反省的に無媒介に直接、覚知されている。しかしこのことが可能なのは私が今まで、左手の内的キネステーズつまり自己運動と同じ手の外的物的運動の知覚とを、ここではその外的な視覚像とを、身体空間の構成にとつて対応づけ、合致させるプロセスが必要だったのでないか(あの物的に自己呈示する身体運動の認知は、専ら視覚に負うところが大きい)。この事態は心理学において、自己受容感覚を視覚系に位置づけることによつて、すなわち運動感覚の内的な身体空間を視覚像による外的な身体空間と合致させる、あるいは両者を互換的に表出可能なものにする<sup>(20)</sup>ことで初めて、まとまりのある一個の身体空間の意識が形成されるという洞察によつて

も裏づけられる。私の左手の運動は「可動的」器官としての手の位置やその手と物（フォーク）との距離・関係などを主に視覚によって遠近法的に対象化することによって本来的に可能になるのであり、それゆえ生きられた主観的身体による客観的世界の構成と、その身体の自己客観化とは相互に依存しあっているのである（Vgl. IV, 56, XV, 279）。

このように通常の意味でのキネステーズ（内的身体性）が知覚的に与えられた身体（外的身体性）と一体となって初めて、本来的な意味での自己運動する「私」の身体、意志的行為としてのキネステーズ的身体運動は成立するのであり、それゆえこれら両者に対応して身体の自己触発と異他触発との相互依存と絡み合いを主張できるのではあるまいか。すなわちフッサールは、生きられた先・反省的な主観的身体とその自己客観化である客観的・物的な身体との間に何らかの関係を見てとっていたのである。ではキネステーズが主観的内面性のみならず、その外部性、外的身体性の側面をもつという以上の現象学的な洞察は、経験科学、特に神経科学の成果とどのように切り結ぶのか。心理学で従来、語られてきた自己受容感覚は広義において現象学というキネステーズ的意識、運動感覚と同じものとして見なされようが、ギブソンが新たに提示した視覚的な自己受容感覚、すなわち自己についての情報を外部（＝視覚的な身体）から提供してくれるこの独特な感覚はフッサールのキネステーズについての帰結、その外的身体性の側面と如何に関わるのか。

#### 四 視覚的な自己受容感覚と外的身体性の構成との平行性

「ここに一つの手がある」ということを君が知っているのであれば、それ以外のことについてはすべて君の主張を認め

よう。……(中略)しかしこれを疑うことが意味をなすかどうかは問われるべきである」(『確実性について』冒頭)というウイトゲンシュタインの言葉を引いて、神経科学者のサックスは、通常、人間のからだは疑う余地のないほど確実なものであるにも拘わらず、その確信が何らかの原因や条件のもとで奪われてしまうことがありうることを様ざまな病的症状を挙げて示している。とりわけ末梢から中枢へと向かう感覚神経の流れである求心性遮断の(deafferented)被験者が示す特有な現象が、自己が自己であるという感覚、あの自己受容感覚の喪失を示しており、その結果、彼らは自分の身体がどこにどうあるのか、どのように動いているのかの情報を全く失ってしまうというのだ。

例えばサックスの紹介しているクリステイナは、頭からつま先までの筋肉や腱の感覚、関節の感覚を失い、さらには運動神経線維まで侵されている重篤の患者であるが、彼女は足元や手をじつと見つめていなければそれらがどこへと動いていくのかがわからないという。あるいは何かを取ろうと手を伸ばしたり、食べ物を口に運ぼうとしたりすると狙いが外れてしまい、自分の身体の根源的なコントロールや調整ができなくなっている<sup>20</sup>。また同様にコールやペイルラード達が挙げているイアン・ウォーターマンという人物は、感染症のために首から下の触覚と筋肉の自己受容感覚を失った結果、手足の運動を開始することはできないものの、何かに手を伸ばそうとしてもそれを取り損ねたり、粗野に通り越したりするし、目をずっと手に向けていなければ運動する手がどこで終了するのかをコントロールできないというのである。さらには自分の足をじつと見続けていなければ立てない人、椅子に座ることができない人もいる。彼らに共通するのは、筋肉その他の自己受容感覚、すなわち自己が自己であるという同一性の感覚を広範囲に、あるいはほとんど全て欠損しているがために、(三)でも確認した先、反省的な自己覚知、つまり自己身体についての生きられた内感、無自覚的な気づきを持ちえなくなっているということである。それゆえ彼らが何らかの仕方

で身体を動かし、環境に適應するためには、相、当、な、精、神、集、中、と、恒、常、的、な、視、覚、的、用、心、を、必、要、と、す、る。<sup>21)</sup>

ここで働いているのは、もはや無自覚の先-反省的な気づきではなく、その都度、自覚的に注意せざるを得ないような自己身体についての反省的な気づきであるだろう。というのも自己受容感覚が欠如しているため、自分の手足がいったいどこにあり、またどのように動いているのかがわからないので、それを代補するために改めて視覚的な知覚に依存しなければならなかったからである。すなわち彼らは手足に関する視覚的な自己受容感覚と視覚的な知覚との結合に頼ることを学び、やがてこのことが徐々に彼らをして正常に動き回らせることを可能にしたのである。つまり従来の意味での外受容系の感覚（視覚）を働かせている時にはもう既に、それを介して自己身体についての情報を入手する視覚的な自己受容感覚（ただし外的な身体像についての）が同時に作動しているのである<sup>22)</sup>。ギブソンもこう述べていた。「運動は、体肢を見ることでも随意に制御できる。視覚システムの運動感受性は、筋および関節システムの運動感受性を代行できる」（『知覚システム』四二頁）と。前者の視覚的な自己受容感覚はギブソン的には自己の身体情報（四肢の位置や姿勢、運動）をわれわれが外側から客観的に得ている感覚であり、これと通常の外的知覚、つまり視覚とが互いに連携し合って、認知主体と環境世界との恒常的な関係が保持されるというわけである。もともとわれわれ正常人の場合には、自己身体の視覚は通常の意味での自己受容感覚と折り合わされ、互換的に表象可能となつていたので、いちいち頭在的に自覚されている必要はなく、自己の統一的な身体像に一体化して組み込まれている。しかし（筋や関節、腱などから得られる）自己受容感覚を喪失した上の病的事例ではこの統一的な身体像が崩壊しているために、それを補う外からの視覚的な身体知覚が役に立ったのである。ちなみにサックスは他に、身体が傾いてしまい水平に姿勢を維持できなくなった老人の例など数多引いて、自己の身体像の回復に視覚的フィードバックが補助機能を果たすことの意味を強調している<sup>23)</sup>。この意味で理解された視覚は、もはや単に外感（官

としての環境の情報を調達する感覚に留まらず、自己身体の情報をも同時に提供するという点で視覚的な自己受容感覚と呼ばれるのであり、ここにこそギブソンが「環境の知覚は同時に自己知覚でもある」と説いた理由がある。

それでは、こうした神経科学のデータおよびそこから帰結するギブソンのあの命題は、フッサールのキネステーズ論とどのように対応するのか。心理学や生理学で従来語られてきた自己受容感覚は、現象学の説く「運動する感覚」つまりキネステーズ的感覚の位相とほぼ同じものと捉えられ、なおかつフッサールはキネステーズを「運動志向性」の意識（「私はなす・くできる」の能力性の意識）という主観的・内的な側面、内的身体性に限定せずに、それが演じられる外部空間、具体的には外的身体性を伴って初めて可能になるのだと見ていた。となると、ギブソンの主張である「視覚情報の流れのパターンは、われわれ自身の運動や姿勢についての知覚を提供する」という視覚的な自己受容感覚の機能は、フッサールが示したキネステーズの外的側面、彼の言葉では内的キネステーズの自己客観化としての外的、客観的で物的な身体運動（＝外的キネステーズ）の構成において専ら働く視覚機能（これはこれで、視覚の内的キネステーズに基づくのであるが）に相当するのではないか。それは、私がフォークに左手を伸ばす時に内側から感じている生きられた内的キネステーズ、つまり本来の自己受容感覚と、それに対応した左手の形・位置・動きなどの、物体としての外的身体性についての構成ないしその所与、換言すれば、ギブソンの言う視覚的な自己受容感覚との平行性と両者の結合である（ギブソンの真骨頂は、視覚を単に環境の諸性質を調達するのに必要な外受容感覚に限定しなかったことである）。このことは心理学において運動感覚系はそれだけでは完結せず、視覚系のうちに位置づけられることよって初めて本来的に機能するという理論とも符合する。内的身体性の所与と外的身体性の所与の接合面、厳密には前者の内的覚知と後者の自己知覚の総合にこそ、キネステーズ的意識の本来的に占める位置があり、それによって統一的な自己の身体像、さらには身体の動きと世界との関わりを習慣化していく「身体図式」が成

立するのであり、自己意識、厳密には身体的自己覚知は、いわば無自覚的・無意識的な内的覚知（気づき）と外的な知覚との連携を必要とするという現象学の洞察は、以上の神経科学のデータおよびその理論の基礎にあるギブソンの自己受容感覚の再定義によって確証されるべき観点を含んでいると言えるだろう。さらに事象に即して言えば、既に（一）で見たように上記の外的な知覚には視覚だけではなく、聴覚や触覚など自己の身体情報を同時に特定する他の複数の自己受容感覚も含まれることから、われわれは全身的な身体感覚のシステム、自己受容感覚のフィードバックを通して、自己知覚とそれによる環境の知覚を同時に成立させているということができるのである。

## 五 結語と展望

最後に、ここまでの考察の成果を身体における「部分機能の全体機能への包括的連関」の理論を補強する側面から見てみよう。視覚の自己受容感覚の重要性という上記の観点は、（一）で述べた知覚システムとしてのわれわれの感覚作用の把握とも関連してくる。一般に、視覚における眼は見るものであると同時に見られるものの位置にくることはない、すなわち二重感覚が認められないのにたいし、触覚における触知器官（肌や手など）は触るものであると同時に触られているものの位置にもくる、いわゆる二重感覚が認められるとされている。しかしこの区別は、感覚を幾何学的な身体空間に位置づけた場合の「局所化」の原理、いわゆる機能局在論に基づいた思考の産物であつて、ギブソンの説いた知覚システムとしての感覚作用という理論からすれば、例えば視覚は頭の回転、上半身の構え、両足の歩行運動によつても可能となつており、後者の様ざまな体躯の運動はむしろ視覚を支える「見る機能」として視知覚

のシステムに同時に組み込まれていると見なせるのではないか。となると見る足は視野のなかで見られるものの側にも属するようになり、したがってあの身体の部分機能の全体機能への包括的な連関、つまり知覚の体系性という観点から、視覚にも二重感覚が見出されうるのではないか。われわれの身体は環境を知覚するに際し、同時に自己の身体をも顕在的にか、ないしは含蓄的にか知覚しているのであり、この場合では私の足は、単に外的な身体像として見られているのではなく、メルロ・ポンティの言い回しに倣って、私の見る機能、その能力の裏面として見られているのであって、足による歩行は少なくとも私の見る働きと一体となつて、「私が動く」際の自己感覚に織り込まれているのである。その意味では、私は触れている自分に触れるのと同様、私は見ている自分を見ているのだと言えるであろう。ここでは逆に、環境の知覚は同時に自己身体の情報を特定する自己知覚でもあるというギブソンの主張が身体の現象学的な記述、すなわち身体の知覚機能の真正な立ち現れの記述によって正当化されるということもできるのである。

このようにフッサールにおける身体性の丹念な現象学的記述のうちには、なるほど感覚の原子論的な思想や局在論的な発想がなお残存していることは否定できないにせよ、彼の思惟がそもそも体系を構築するのではなく事象と方法との不断の往還運動に基づく「作業哲学」であつたことを鑑みれば、その歩みのうちに垣間見られる、従来の純粹な意識内在主義の立場を揺り動かすさまざまな動機づけを読みとることができるであろう。本稿ではそれらを、知覚の行為性格ないし全体的システム性という観点から捉え、さらには身体の超越的経験の位相に位置づけられる外的身体性の記述に即して検討してきた。こうしたフッサールの試みは、古典的な計算主義や現代のコネクショニズムなどを理論的基盤とする認知科学（例えば脳科学や人工知能研究）の支配的な考え方に対して、彼のキネステーズ論に示唆されている「知覚のなかの行為」（A・ノエ）、すなわちエナクション（＝身体化された活動）という発想において、<sup>24</sup>

ギブソン心理学の生態学的立場と極めて著しい親近性を有していることが知られる。もちろん両者の間に、一人称的な内側からの立ち現れの記述と三人称的な客観的な観察記述という違いはあるとしても、意識（心）——身体——環境（世界）の三要素を単なる加算的複合としてではなく有機的に統合されたいわば「世界——内——存在」として捉えるという意味で、対話の可能性はなお開かれているといえるだろう。それゆえ例えば、本稿では詳しく触れられなかったが、脳内の情報処理操作によって間接的に表象化されるのではないような環境それ自体の側にあるアフオーダンスとしての意味や価値が直接的に知覚されるというギブソンの発想を、単に物理的な知覚意味のみに限定せずに、フッサール自身も既に『純粹現象学および現象学の哲学のための諸構想』二巻や『現象学的心理学』の中で度々言及していた、事物知覚を最初から貫いている価値・意味の統覚という観点、および有意義性連関における本源的な物の出合われ方としての道具存在というハイデガールの立場などと関係づけて考究していくことが可能となるだろう（これと同趣旨のことはギブソン研究者のロンバードも指摘している論点である。注（7）を参照。またアフオーダンスの位相が、序でも触れたようにそれが受感的構成素であれ認知的構成素であれ、あらゆる感覚作用に必然的に伴う「自我——他なるもの（世界）」という全体性連関（E・シュトラウス）におけるいわゆる他性の次元に位置づけられることから<sup>25)</sup>、これとフッサールの術語であるヒュレーないし「原ヒュレー」の与えられ方を同一の土俵に載せて、より具体的に吟味・検討していくことも今後の課題として残される。

注

(1) ギブソンからの引用は原典と対照させた上で邦訳文献に依拠し、引用頁数は本文中に組みこんだ。

ギブソン『生態学的視覚論——ヒトの知覚世界を探る——』古崎 敬他訳（サイエンス社）〔本文では『生態』と略記する〕

J・J・GIBSON, *THE ECOLOGICAL APPROACH TO VISUAL PERCEPTION*, 1979.

ギブソン『生態学的知覚システム——感性をとらえなおす——』佐々木正人他訳（東京大学出版会）〔本文では『知覚システム』と略記する〕

J・J・GIBSON, *The Senses Considered as Perceptual Systems*, 1966.

(2) 小林 睦は、フッサールの超越論的観念論とギブソンの直接実在論とを明確に峻別しながらも、両者に共通する視点として「知覚の行為性」をむしろ肯定的に取り出して議論している。ただし彼はそこで、表象主義を古典的「計算主義」と現代の「コネクショニズム」に狭く限定しているのであるが、広義にはフッサール現象学（中期）をも、外的な因果連関を排除し、世界を意識内在の領域で構成するという立場から表象主義（ないし準表象主義）の中に入れても差し支えないように思われる。

小林 睦『フッサールとギブソン——知覚の行為性をめぐって——』（東北大学大学院文学研究科 哲学・倫理学合同研究室『思索』第四〇号二〇〇七年）八一〜一一一頁。

なお野家伸也は、フッサールの超越論的観念論を、それが心的活動をノエマに加えられる操作を旨としているという点から、認知科学における計算主義やコネクショニズムの標榜する「表象主義」と同型だとみなしている。

野家伸也『認知論的転回——認知科学における現象学的思惟——』（『思想』二〇〇〇年一月 現象学の二〇〇〇年第九六号所収）二〇六頁参照。

(3) 河野哲也『環境に広がる心——生態学的哲学の展望——』（勁草書房）参照。

(4) 同上『エロジカルな心の哲学——ギブソンの実在論から——』（勁草書房）参照。

『身体化された心——仏教思想からのエナクティブ・アプローチ——』（工作舎）ヴァレラ・トンプソン・ロッシュ著 田中靖夫訳 参照。

(5) 筆者は、河野による生態学的哲学の構想とその仔細な跡づけには全面的に賛意を唱えるものであるが、彼の以下の見

解には首をかしげざるをえない。「フッサールは「私はできる (Ich kann)」という初源的能力(『運動志向性』)が私たちの経験構成の根底にあり、それはすべての志向を可能にする「予持」であり、キネステゼ的に経験を構造化すると論じている。しかし私の考えでは、環境の側のアフオーダーダンスこそが「私はできる」(運動志向性)を与える。アフオーダーが根源的な志向性を準備するのであり、私たち主観はその一部に気づくだけである」と。しかしこうした理解は、本稿での主張であるキネステゼ存立の十分条件、すなわち世界の側からの感性的触発としての「原ヒュレー」や内的身体性に伴う外的身体性の位置づけを無視した表面的な理解に留まっているように思われる。

河野哲也『4 脳から身体・環境へ——エコロジカル・アプローチと拡張した心——』(『岩波講座 哲学05 心/脳の哲学』岩波書店) 一〇一頁参照。

(6) ミシエル・アンリは、フッサールにおける内在的意識の露呈はまだ不十分だとして、むしろ世界への超越の現れそのものを可能にしている内在の根源的な自己触発を徹底して掘り下げ、そこに「非志向的で」絶対的受動性において開示される「情感的」世界を見るのであるが、果たして現象学的な「生」はこうした内在の純粹自己触発だけで成立するのであるのか。こうした疑問に照らして、筆者はかつて自己触発と世界からの異他触発とは不可分であるとして、それを身体的自己覚知と時間的自己覚知とともに関与する経験の「他性」、例えば世界実質(『贈与』)としての原ヒュレーや外的身体的性、時間意識における内的差異化の運動という側面から、吟味・検討した。本稿も同じ問題系に属し、特に前者の身体的自己覚知において働く他性の側面を、より具体的に論証しようとする動機づけに依拠している。ただし本稿では、アンリの内在の哲学に焦点を当ててゐるものではない。

拙稿「先・反省的自己覚知と他性——二重の「超越」の運動——」(日本現象学会編『現象学年報』平成一九年・一月第二三号 所収)

拙稿「自己触発と他性——時間的自己覚知の構造——」(関西大学哲学会『哲学』平成二三年・三月 第二九号 所収)

(7) 「アフオーダーダンス」は単に物理的な知覚意味だけではなく、ギブソン自身はあまり考慮しなかったが、価値的・情意的な意味も含まれる包括的な概念であることに注意がある。例えば、「母親もその髪が長く黒いと知覚される前に、子どもにとってはまずは自分を育み、安らぎを与え、優しくしてくれるなどのアフオーダーダンスとして知覚される」。

T・J・ロンバード『ギブソンの生態学的心理学——その哲学的・科学史的背景——』(勤草書房) 四一六〜四一七頁参照。

- (8) 河野哲也『環境に拡がる心——生態学的哲学の展望——』四六頁参照。
- (9) フッサールの既刊著作における引用(参照)箇所のローマ数字は『フッサール著作集(Husserliana)』の巻数を表し、ページ数をアラビア数字で示す。なお草稿(Ms)からの引用は、注に典拠先を記す。
- (10) Zahavi, D., *Self-Awareness and Alterity, A Phenomenological Investigation*, 1999, p. 93.
- (11) 特に前者のギンソンの場合、元々哲学についての幅広い素養を有し、また母国アメリカのプラグマティズムの影響を色濃く受けているという点からも、例えばR・ローティの西欧哲学に対する鋭い批判に見られるように、「哲学と自然の鏡」、認識の主体としての超越論的主観(「心」)を、とりわけ近代のデカルト以来、自然を忠実に映し出す「鏡」と捉える伝統的哲学の表象主義、およびそれと関連して「意識」による自然の構成主義の軛からの解放という意図を自らの認知心理学の一貫した課題として継承したことの動機づけが窺える。
- (12) ここでの論述は、既に筆者が発表した以下の論文に依拠している。  
拙稿「フッサールにおける二重感覚の問題」(日本現象学会編『現象学年報』平成九年一月 第二二号所収)
- (13) 河野哲也『エロロジカルな心の哲学——ギンソンの実在論から——』五七〜六〇頁参照。
- (14) 本節の論述のほとんどは、前掲論文「先・反省的自覚知と他性——二重の「超越」の運動——」の記述による。
- (15) Landgrebe, L., *Phänomenologische Analyse und Dialektik*, in: *Phänomenologische Forschungen* Bd. 10, S. 78.
- (16) こうしたアフオーダーダンスの主観的側面を強調する立場は、ギンソンに影響を与えたケシュタルト心理学のK・コフカが提唱したアフオーダーダンスの先駆的概念である「要求特性(demand character)」のうちにも見てとれる。この考え方によると、例えば郵便ポストが私に手紙を投函してくれと誘発してくるのは、最終的には私の側の「手紙を投函したい」という主観的な状態に依存することになる。
- (17) Ms. D10, 11a, from Zahavi, D., op. cit., p. 123.
- (18) 水野和久『他性の境界』九一〜一〇三頁参照。
- (19) Waldenfels, B., *Phänomenologie in Frankfurt*, 1. Aufl., Suhrkamp, 1983, S. 353.
- (20) 水野 前掲書 一〇二頁。
- (21) オリバー・サックス『妻を帽子とまちがえた男』(晶文社) 九一〜一一〇頁参照。
- (22) Cole, J. and Pailard, J., *Living without Touch and Peripheral Information about Body Position and Movement*: Studies with

Deafertented Subjects, in: *The Body And The Self*, A Bradford Book The MIT Press Cambridge, Massachusetts London, England, pp.248-250.

Zahavi, D., op. cit., p.101f.

シヨーン・ギャラガー、ダン・ザハアヴィ『現象学的な心——心の哲学と認知科学入門——』石原孝二他訳（勁草書房）二一九～二二〇頁参照。

アルヴァ・ノエ 邦訳『知覚のなかの行為（*Action in Perception*）』門脇俊介他訳（春秋社）二二一頁参照。

(22) Cole, J and Paillard, J., op. cit., pp.250-252.

「求心性神経の遮断の患者において観察された）それらの損傷はまた、運動指揮の損なわれていない遠心性システムの上で、自発的な統制を取り戻すために、如何に遙かに視覚起源の自己受容情報がキネステーズ的痕跡のレパートリーを再マッピングする際に、喪失している、筋肉起源の自己受容情報を補完し、かつそれにとって代わるかの問題を提出する」（op. cit., p.252, 傍点筆者強調）。

(23) サックス 前掲書 一三八～一四六頁参照。

(24) ノエ 前掲書 第一章「知覚に対するエナクティブ・アプローチ」（序論）参照。

(25) 「感覚的経験は、自我—世界連関の経験である。自己覚知は、世界の覚知に先行しない。すなわち一方は他方の前にはないし、一方は他方なしには存在しない。世界は私の活動性の対照物（counterpart）であり、そうやって私は世界の力によつて触発されるのである」。

Strauss, E., *Phenomenological Psychology: Selected Papers*, Newyork 1966, p.283.